

風姿花伝 七

別紙口伝 その九の二

三日間に渡って三回、三庭の申樂が催されるような場合には、一日目である指寄さしよりでは、手を貯ため、あしろうようにして演じ、三日間の中で、この日にこそはと思う日に、良い演目で、しかも最も得意なものを、目に力を入れ、精魂を込めて演らなければならぬ。また一日のなかでも、競演する相手のある立合の際に、どうしても、なぜか調子がよくなく、女時の状態にあると思う時には、まずは最初は手を貯ため、抑えめに演じて、敵の調子が下がって、男時から女時に移ったと思われる時分に、良い能を、持てる技を次から次へと繰り出して、精一杯、力を尽くして演技を行うと良い。そうすればやがて、男時もまたこちらの方に戻ってくる。そしてその時に、良い能が出来たと思ったら、すかさず、その日の最高の出し物を行うと良い。

ここで言う、男時、女時ということに関しては、何においても勝負事というものにはすべて、必ず、片方に勢いが出て、潮目がそちらに傾くような時分があるもので、それを男時と心得ると良い。立合の場が多く、勝負する時間が長い場合には、その男時が、あちらに行ったりこちらに来たりする。ある書物には、「勝負の神にも、勝つ神、負ける神というのがある。そうした神々が、勝負を見ながら、様子を見守っているものであって、それが武道における最大の秘事である」と書いてある。だから、敵方の申樂が良くなってきたら、どうやら勝つ神は向こうの方にいらっしやるようだと思ひ、慎んでそのことを受け入れなくてはならない。勝つ神、負ける神は、勝負の時を司る二神であり、あちらやこちらに行ったり来たりしてそのつど居場所を変えるので、自分の方に来られたぞと思つた時にこそ、最も確かな、自分が頼みとする能を演ずるべきである。これがすなわち、能の舞台における因果である。重ねて言うが、このことを決しておろそかにしてはならない。信じるところにこそ、徳もまたあるのである。